

地域の伝統文化を  
未来につなげる

# “歴まち計画” によるまちづくり

## 島根県松江市

JIAMでは、令和7年6月25日～27日の3日間の日程で、「文化資源を生かしたまちづくり」をテーマに研修を実施し、文化の持つ多様な魅力と創造性について学ぶとともに、文化のまちづくりへの活用について考えました。

今回は、平成23年に歴史的風致維持向上計画を策定し、住民主導で地区ごとのまち歩きマップを作成するなど、地域全体で文化資源の継承に取り組んでいる島根県松江市の「歴まち計画」事業について紹介します。



島根県

島根県松江市

人口19万2,944人・世帯数9万2,211世帯（令和7年8月末現在）。松江藩の城下町として発展してきた山陰地方最大の都市（中核市指定）で、北は日本海、南は中国山地に接する。平成17年に1市6町1村\*による新設合併で新松江市が発足、23年に東出雲町を編入、市域は572.96㎢となっている。日本有数の汽水湖である中海と宍道湖、それをつなぐ大橋川などを有する水の都であり、国宝松江城、名湯玉造温泉、出雲神話の舞台となる数々の神社などが国内外の人々を惹きつけている。

\* 松江市・鹿島町・島根町・美保関町・玉湯町・宍道町・八束町・八雲村

## 「古き良き日本」を守って生かす

鳥根の県都・松江の形容は実に多彩である——「神々が息づくまち」「水の都」「茶の湯のまち」「日本の原風景」——。『古事記』『出雲風土記』に描かれた神話の世界、宍道湖、川筋の水辺や国宝松江城天守と城下町の景観……それらに魅せられた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江の風景と人々の営みを生き生きと作品に描写した。令和の松江を歩いても、水辺に、町並みに歴史と伝統に裏付けられた情緒と風情を楽しむことができる。

松江市では、昭和48年に「伝統美観保存条例」を施行して以来、松江城周辺の町並み保存に力を注いできた。一方で、平成9年に松江堀川遊覧船、12年には旧日本銀行松江支店の建物を活用した複合施設をオープンするなど、松江の美観を観光へと生かす取り組みも行っている。

## 9か所の風致地区

### 古代「出雲」に見られる歴史的風致

- ・ 出雲国府跡周辺
- ・ 神在祭と佐陀神能
- ・ 美保関のみなと文化



【佐陀神能】  
佐太神社に400年  
続く神事芸能

### 近世「松江」に見られる歴史的風致

- ・ ホーランエンヤ  
どう
- ・ 鑿行列
- ・ 茶の湯文化
- ・ 堀川
- ・ 近世山陰道沿線の宿場町
- ・ 宍道湖、佐陀川



【ホーランエンヤ】  
日本三大船神事に  
数えられ、10年に  
1度実施される

カラコロ工房（登録有形文化財・旧日本銀行松江支店）  
小泉八雲が、木橋であった松江大橋をわたる下駄の「カラコロ」と響く音を作品に残したことから命名された。

平成19年には「松江市景観計画・松江市景観条例」を施行。同時期に開催された松江開府400年祭により、伝統文化に対する市民の意識や活動も高まりを見せた。そこで、市は「松江市歴史的風致維持向上計画」（以下、歴まち計画）を策定（平成23年に国の認定を受ける）、歴史や文化を生かしたまちづくりを本格化することとなった。

「歴史的風致」は、歴史的価値の高い建造物だけでなく、工芸品や祭礼行事などの人々の営みも大切な要素として構成される。松江市の計画では、「古代出雲」「近世松江」をキーワードに市内に9か所の風致地区（左下図参照）を定めた上で、5つの重点区域を設定、歴史的建造物の積極的な保存と活用、景観の保全、伝統文化の継承・育成、まち歩き観光の充実などの基本方針を打ち出した。

これらの計画に取り組むにあたり、市は平成26年、教育委員会に属する文化財保護と市長部局の都市整備部門を統合した「歴史まちづくり部」を創設、歴史的建造物の<sup>しつかり</sup>悉皆調査をはじめとした数々の事業を軌道に乗せることに成功した。



各地区で作成した“まち歩きマップ”パンフレット  
体裁やデザインは各地区の自由で、1地区上限30万円が支援される。パンフレットの情報はホームページに掲載するだけでなく、各地区の案内看板にも活用されている。

## 住民による「わがまち自慢発掘」

今回取材に協力していただいたのは、現在「歴まち計画」の担当部署である文化スポーツ部文化財課歴史まちづくり係の山崎美沙さん。「令和2年から歴まち計画に関する事業を引き継いで今に至ります」。山崎さんが事業に取り組んでいて強く感じたのは、住民の地域に対する強い思いだという。

住民活動は計画策定以前から行われており、平成19年の松江開府400年祭をきっかけに、地元をよく知るため「小さな観光（まち歩き）」に対する機運が高まった。平成21年から市内29の公民館区で、住民主体で地元の「まち歩きマップ」の作成が始まり、全地区のマップパンフレットが完成したのは平成25





年。「歴まち計画を策定するときにも、地元の方々の情報がたいへん役に立ったと聞いています。マップや情報は観光客にも好評ですが、学校の地域学習にも使われており、新しく赴任する小学校の先生などにとっても、地元を知る格好のアイテムとなっています」。

これらのマップを活用し、公民館と市で「歴史のまち歩き」も開始した。「当初は、年1、2回の開催でしたが、行動が制限されたコロナ禍のときには、



戸外の事業であることで応募が殺到しました。今では、地元の方にガイドをしていたら年6回くらいの開催に増やしています。車移動が中心の生活の中、町を歩くことで、地域住民でも知らない地域の歴史を知ることができ、好評を博したという。

「地元の方だけでなく、市外の方の参加もけっこうあり、令和7年度からは、公民館区を超え、たとえば、小泉八雲と妻・セツの足跡など、テーマを決めたまち歩きを企画し、参加の年齢層も広げていきたいと考えています」。

景観の保存に対する住民の意識も高い。平成26年、堀川遊覧船のコースで

**塩見縄手と武家屋敷** 小泉八雲旧居をはじめ武家屋敷風の家が堀に沿い軒を接し、松江で最も城下町らしいたたずまいを残している。一帯はかつて500石から1,000石取りの中老格の藩士の屋敷が並んでいた。



ある京橋川流域の5地区と市は、「歴史まちづくり協定」を結んだ。官民連携でルールを決め、住民は景観に配慮した建物の修繕や改築を進め、市は補助金で支援を行っている。「協定は対象区域内の土地・建物の所有者の3分の2の合意が必要なのですが、皆さん松江の景観を守るために協力してくださっています」と山崎さん。

地域のシンボル・松江城とその周辺の景観を文化資源として守ってきた先人たちの思いが今に受け継がれている。

#### 歴史のまち歩き

まち歩きマップをもとに、地元ガイドとともに公民館エリアの見どころをめぐる。1日の定員は40名だが、毎回定員を上回る人気。上は朝酌地区の「矢田渡船でめぐる出雲国風土記・ホーランエンヤコース」。右は雑賀地区の「偉人の足跡めぐりコース」。



### まちづくり協定による修繕・改築例

京橋川沿線地区の場合、建築物（屋根・壁・建具等）は上限200万円、工作物（門・塀・生垣等）は上限50万円支援される。



平成29年度道すじ修景事例



平成26年度道すじ修景事例



## 歴史的建造物登録制度による改修例 はまのや 濱延舎 (旧濱中屋)

おおむね昭和25年ごろまでに建築されたもの(建築基準法施行以前)、将来にわたって適切な保全継承(維持管理・活用が見込まれるもの)が登録の必須要件となっている。



### 「重伝建」指定への挑戦

平成27年、松江城天守が国宝に指定されたことを契機に、翌年、市は「松江市登録歴史的建造物」の登録制度を創設した。「松江城調査研究委員会」の初代委員長の故・西和夫先生の『天守がすばらしくても町全体がよくなってはせつかくの天守の価値は薄れる。今以上に厚みのある町を築いていくことが望まれる』という言葉がきっかけになりました」と話す山崎さん。

同制度は、登録建造物の所有者と市の間で10年間の保存契約を締結する。これまで21軒が登録、市はすでに12軒の改修を支援しており、該当エリアの登録有形文化財の建造物にも支援を行っている。しかし、10年の契約期間中に世代交代をする所有者もあり、維持・保存の確約ができないこともある。また、登録の条件の一つである内部公開がネックになることも多い。その一方で、登録建造物の一斉公開イベントは多くの誘客に成功した。建物を随時公

開する所有者もおり、まちに賑わいが生まれるなど、事業は着実に進展している。

「歴まち計画」は現在、第2期計画の中間評価を終えた。山崎さんに事業の今後を聞くと、「令和8年度を目標に、美保関地区の重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)選定に向けて取り組んでいます」という言葉が返ってきた。すでに住民組織「美保関まちなみ研究会」が発足し、先進地視察や住民主体のイベント開催などに取り組んでいる。重伝建選定に向けた動きには、これまでの「歴まち計画」の取り組みで得られたノウハウが活かされているという。住民主体のイベントの支援に加え、建造物の調査で協力を得た県の建築士会に依頼し、建造物修復・改築のための技術講座も実施、加えて地区にある空き家の内覧ツアーも行い、建物の有効活用の可能性も探っている。

「イベントを開催したら、多くの人が出てくれたと地元のお年寄りが大喜び



### 歴史的建造物の一斉公開イベント

令和3年3月のイベントでは、東本町・京店・東茶町の5つの登録歴史的建造物をめぐった。建築士が、建造物や町の成り立ちについての専門的なガイドを行った。

してくれた姿が印象的でした」と山崎さん。重伝建に指定されれば、歴史的な町並みが保存されるとともに、住民が暮らしやすい環境が整備されるうえ観光誘客も見込まれると、期待を膨らませる。今後は、建築や観光の担当部署と業務を分担協力して事業を進めていきたいという。

近代化が進む中であって、歴史と自然、人々の営みが融合した古き良き文化を伝える松江。この町のたたくまいを守り、磨き上げてきたのは、人々の静かな共鳴の波だった。「歴史は時間につながりますが、人々が作り出した伝統と文化は意識してつなげていかなければならないと痛感しています」という山崎さんの言葉が心に残った。

【取材・写真協力 松江市文化スポーツ部 文化財課歴史まちづくり係】



歴史的建造物をめぐるまち歩き(美保関地区の青石畳通り)